

科目区分：中等教育コース（音楽教育専攻）

授業科目名：声楽基礎演習

教育現場を見据えた初年次の歌唱指導力の育成

音楽教育講座・木村 勢津

I 授業の概要

1. 目的

小学校、中学校および高等学校で適切な歌唱指導を行うために、発声および歌唱に関する基本的な知識を身につけ、基礎的技術の習得と学習方法の基礎を確立する。

2. 到達目標

- 1) 発声の原理および歌唱のしくみを述べることができる。
- 2) 楽曲にふさわしい表現方法について、自分なり意見をもち、論述することができる。
- 3) 自分の声について、その特徴を知り、長所を伸ばし、短所を改善し、楽曲にふさわしい声で歌唱する。

1年前期の「声楽基礎(合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む)」では、西洋音楽における発声の基本原理を理解し、声を用いて、思いやイメージを他者に伝えようとする意欲の構築と学びの基本姿勢を養成することを目標として授業を展開した。「声楽基礎」の単位取得を履修条件としている本授業では、前期の理論的学びを基に、上記の1)～3)の到達目標を掲げて歌唱演習を中核とした授業を実施している。

3. 授業の位置づけ

本授業は、中等教育コース音楽教育専攻の1年生を対象として開講されている選択必修科目である。カリキュラムマップ上では基礎・展開・応用のうち、基礎的科目として位置づけられており、歌唱表現や教育現場における発声指導を円滑に行うために必要な基礎的知識と能力を養う基盤となる。

4. 受講者数と受講生の状況

受講者は7名で、内訳は音楽教育専攻の1年生4名全員と初等教育コース・小学校サブコ

ース1年生2名、特別支援教育教員養成課程2年生1名であった。第1回目の授業で行った事前調査によれば、校種の違いは認められるものの、受講生全員が教職を希望している。また、小サブの学生の中には、中学校二種免を希望する学生が見受けられた。

5. 授業改善の方針

授業目的のひとつである基礎的技術の修得と学習方法の基礎を確立するためには、①目的意識を明確にすること ②自己発声や歌唱において「できた」「わかった」の達成感を感得できること ③なぜ「できた」のかを理論と結びつけて考えることができること の3つが重要であり、本授業における深い学びに繋がるものと考えた。また、教師を目指す受講生にとって、教育現場を見据えた授業内容が、学習意欲に繋がるものであると考え、上記に挙げた3つの内容と教育現場で応用できる演習内容の充実を授業改善の方針とした。

II 授業研究の取り組み

1. 目的意識の明確化

1.1 「基礎セミナーB」との関連

本年度、授業者は中等教育コース音楽教育専攻生を対象とした前期「基礎セミナーB」を担当したが、この授業において、中学校の授業観察に加え、特別支援学校の協力を得て、同校の授業参観および受講生によるミニコンサートを実施した。特別支援学校の生徒の前で演奏する体験は、教員志望学生にとって、初年次から教育現場に触れることの有用性はいままでもないが、音楽専攻生にとって障害児教育における音楽教育の意義を考える場を提供することは、大学での学びの内容を具体的に構築する材料となり、各自の学びのマップ(学習計画)を作成するために有用であると考えたからである。「この基礎セミナーB」で

の体験を基に、本学において、声楽領域で学びたいこと、学ばなければならないことの明確化を図った。

1.2 教育現場を想定した具体的授業内容

授業改善を目指して行った授業のポイントと意図を以下に示す。

(1) 毎回、授業冒頭の10分～15分を用いて、呼吸法や発声練習の方法、歌唱に繋がる身体運動の有効な活用方法を、校種や学年別に具体的事例を用いて理論的説明と演習を行い、各自の技術面における向上を図り、教職に就くことへの意識を高める。

(2) 小学校、中学校の歌唱共通教材を用いて、受講生が伴奏を行う歌唱演習の実施により、各自の歌唱技法や歌唱表現上の課題を明確にし、学習の目的意識を高める。

(3) 歌唱教材については、歌唱技法修得のための練習曲も含め受講者による伴奏の機会を多く設け、経験値を高める。

2. 達成感を感得できる授業

実技系の授業では、変化への気づきや達成感が校種を問わず、個の成長に大きく関わると考えている。歌唱への苦手意識を持つ受講生を有する本授業において、この意識を払拭し、自らが楽しんで歌えることを目指し、以下の試みを行った。

(1) 受講生の前で、本人が自覚できる発声や歌唱表現の変化を感得させる指導を行う。

(2) 個別指導で、改善点と具体的練習方法を明示する。

(3) 中間発表を設定し、録画した演奏と、他の受講生によるコメント（長所と今後直す課題）を各自に示し、学習の成果を示すことで成長を認識させ、学習意欲の高揚に努める。

3. 実技と理論の往還による授業

前期の「声楽基礎」で学習した理論と歌唱技術の習得と関連性を受講生が感得するために、前期で概説した発声の理論や関連する内容をまとめ、演習と平行して、パワーポイント等で受講生に示し、理論との往還を図った。

Ⅲ 授業評価の方法と結果

授業改善の評価方法は、毎回提出を義務づけている受講票ならびに授業終了時に行った授業評価に関するアンケート調査の回答結果に基づき行った。なお、アンケートは紙媒体

による無記名方式、回収に当たっては、受講生が取り纏めることとし、回収率は100%であった。

1. 目的意識の明確化

1.1 「基礎セミナーB」との関連

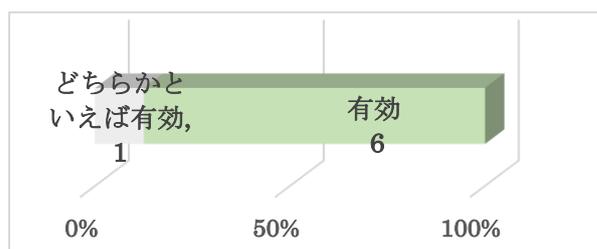
「基礎セミナーB」を受講していない小サブ及び特別支援教育教員養成課程の3名については、対象外となる。中等教育教員養成課程音楽教育専攻の受講生からは、「基礎セミナーB」で講義した禁止をしない指導法についてのコメントが受講票に頻りに記載されており、また、特別支援の児童・生徒への音楽指導の対応についての記載も認められた。

1.2 教育現場を想定した具体的授業内容

アンケート結果を示し、成果を示す。

選択方式の設問は5段階評価（1.有効→5.有効でない）で行った。

【設問】教育現場に応用できる歌唱のための身体運動や息の訓練方法は、教員になった時に有効と感じましたか。



【設問】有効性を感じた具体的指導の内容と活用法について述べてください。(自由記述)
受講生からの回答のうち、複数の受講生が記述した内容をまとめたものは以下のとおりである。なお、複数回答が含まれている。

- 短時間で身体を温めるための運動 4名
- 身体をほぐすための身体運動 4名
- 口笛や手遊び歌を用いた訓練 3名
- 正しい姿勢のポイント指導 3名
- 息のための訓練 2名

【設問】この授業を受講して、教育現場に役立つと感じたことを挙げてください。

7名の受講生全員からの回答があった。その内、2名以上の受講生が記載した内容の一部を記載する。

- 歌唱が苦手な子や変声期の児童・生徒への対応
- 言葉がけの具体的事例や方法
- 「できた」と感じる指導の大切さ
- 演奏者の息づかいやイメージを大切にしたい

教育現場に応用できる授業内容については、7名の受講生のうち、6名が有効と回答している。また、授業内容から具体的に教職に就いた時に役立つ内容を具体的に述べている。初年次の目標に沿って、歌唱課題を設定し、指導法を交えながら演習を行うことにより、教員志望のモチベーションを上げることができたと考える。

2. 達成感を感得できる授業

受講中に自分の声の変化が実感できる個別指導を試みた。上記2の(1)及び(2)の成果の事例を受講票の記述からいくつか示す。3名は異なる受講生である。

A：自分の歌い方と自分の理想の歌い方の違いを感じ取ることができました。特に口の開け方で声の響きや印象がかなり変わることに驚きました。(第9回受講票)

B：「ながめを何に」の最高音を出すときに丹田辺りを押さえてもらおうと自分でも驚くような、透明感がありはっきりとしていて音量も大きな声が出せるということだ。最初にそのことを体感した時は声の出しやすさに感動して、自分の声量についてあまり意識できていなかったが、再び試した時に声の出しやすさと共に声量の違いにも気づき非常に驚いた。(第10回受講票)

C：いつも2番のpからfに変わっていくところで力が入って、硬いfの歌声になってしまっていたのが、先生に指導していただいたときにとても声伸びたのを感じました。～中略～また、Bさんの歌声が非常に変わったことが今回の授業で最も印象に残りました。(第10回受講票)

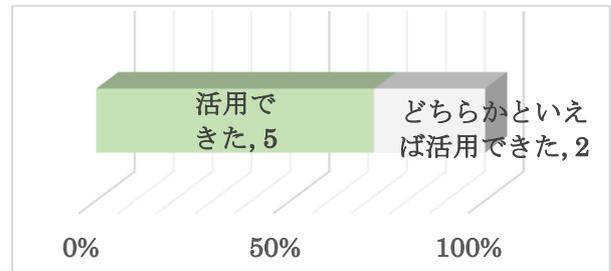
BとCは同日の個別指導で、CはBの歌声の変化について感想を述べている。

【設問】中間発表の録画は有効にいかされましたか。



【設問】友人からのコメントはあなたにとっ

て有意義でしたか。



「生かした」、「活用できた」と回答した5名は者、すべて同一人物である。

録画視聴から活用内容として、表情、姿勢に関する記述が最も多く、ほぼ全員の受講生が記載していた。授業で歌唱時の視線について、詳しく説明し指導したが、この点に関する気づきを記載していた受講生が多かったことは、次ぎに示す実技と理論の往還とも関連し、授業者として興味深い記述であった。他の受講生からのコメントについては、異なる視点からの指摘が、自分の演奏を客観的に振り返るために有意義であると回答した受講生が大半であった。

3. 実技と理論の往還による授業

この授業を受講しようと思った動機として、中等教育コース音楽教育専攻以外の受講生は、①自分の歌唱に対する苦手や課題を克服したい、②他者に教授する方法、知識がなく、それを得たい。③元来歌うことが好きであるが、歌うことの楽しさをどのように伝えるかを学びたい、④自分の発声時の癖を指摘していただいたことで改善したい、⑤自分の声の特徴を知り、改善して伸ばしていきたい、⑥前期の音楽基礎が興味あるものだったとの回答があった。これに対する達成度を示すものとして、また、授業改善の総括的意味をお込めて、第15回の受講票の記載内容の一部を示す。

○歌を歌う時の身体の使い方を体感しながら学ぶことができたことで理解しやすく嬉しかったです。この授業を通してさらに音楽に興味を持つようになりました。

○先生または同じく音楽を学びたいと思っている子に様々な面から見てもらうことで、直していくポイントが多く見つかる。この授業を受講する前、私の大きな課題は高音域を歌うのに喉を閉めて歌う、または体が力んでしまっていることだった。そこで学んだのが、息の割合と声色部分の割合である。

○自分の歌唱の癖を発見し、歌の技術力・表現力を高めるだけでなく、短いストレッチなど、将来教員になった時に役立つことも多く学ぶことが出来ました。

○自分の歌声が徐々に変化していることを感じ、今まで苦手ではないけれど得意でもなかった歌唱に少し自信が持てるようになりました。

○歌うことは、以前は自己満足の範疇であったが、この講義を通して観客に届けるものという意識が芽生えた。

○他分ができたことが実感できるということがいかに成長につながるかを感じた。また、人の歌唱について、どこをどう直したらもっと良くなるのか分析する能力の未熟さを痛感し、もっと理論やその伝え方なども勉強していきたいと思った。自身の声について、客観的な意見を先生や受講生からもらえ、自分のスキルアップのための手掛かりにすることができた。

○自分の歌唱の癖を発見し、歌の技術力・表現力を高めるだけでなく、短いストレッチなど、将来教員になった時に役立つことも多く学ぶことが出来ました。

4.「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

授業者は、今年度、今治市の小学校の先生方と歌唱共通教材を基に、子どもたちが楽しさを感得できる歌唱指導について研究を進めてきた。また、20年余り、愛媛県教育委員会から依頼を受け、愛媛県内の小中学校において、児童・生徒への歌唱指導を継続的に行っている。すでに100校以上の学校でこの活動を実施した経験から、教員養成課程の使命として、範唱の力を育成の重要性と児童・生徒の歌唱の特徴を的確に判断し、個に応じた歌唱指導を行える力の育成の重要性を痛感している。

教職志望の学生には、初年次から教員になることのモチベーションを高め、音楽の指導を意識した授業展開を心がけるべきとの考えを持ち、今回の授業改善を試みた。「基礎セミナーB」「声楽基礎」をベースとしてその延長線上にある本授業においての効果は、上記に示したとおりであり、受講生が授業の意義を受け止め、自分の今後の課題を意識して、授業を終えたことに一定の成果があったと自

負している。

IV 今後の課題

中等教育音楽専攻生と他のコースや課程の受講生には、音楽の基礎的知識とピアノ演奏能力に格差があり、ピアノ伴奏を全員が体験し、歌い手の音楽表現イメージに沿って演奏することの体験をさせることができなかった。歌に苦手意識を抱いている受講生の苦手意識の要素に、音域の狭さ、音量が少ないこと、息の継続時間の短さ、音程の不確実さなどが挙げられる。このような悩みを持つ受講生にとって、毎回の授業での個別指導は重要であるが、90分の授業時間で全員に満足いく個別指導が行えないことがあった。この点については、今後の課題としたい。